

仙台藩の茶の湯と大條家

平成30年11月

石州清水流 十四代家元 清水 道玄

1 山元町指定文化財「大條家ゆかりの茶室」

本茶室は、伊達家が秀吉より拝領したという伝承があり、後に大條氏が伊達家から下賜されて仙台北下の屋敷に移し、更に昭和7年に山元町に移築されたという。

藩祖政宗以来歴代藩主に重んじられた仙台北下における茶の湯文化・歴史の流れを伝える茶室として文化的価値は非常に高い。

建築物としては、様々な改築・増築の経緯があり、正確な築年代の特定にはさらなる検証を待つ必要があるものの、桃山時代の部材の存在の可能性も秘めており、随所に意匠を凝らした



書院風茶室として数少ないすぐれた遺構といえる。(山形大学大学院理工学研究科 教授 永井康雄)

2 石州流について

石州流は、大和小泉藩（大和郡山市）二代藩主の片桐貞昌（1605～1673）の茶の湯を伝承する全国各地の流派の総称である。

貞昌公は寛永元年（1624）、従五位下石見守に任じられたので、別名「石州」と呼ばれている。

3 片桐石見守貞昌（石州）公について

■生涯

石州は、慶長10年（1605）、初代藩主・片桐貞隆の長男として摂津茨木で生まれる。

茶の湯を千利休（1522～1591）の長男である千道安（1546～1607）の門人である桑山宗仙（1560～1632）から学び、皆伝を受けている。

寛永10年（1633）の火災で京都東山知恩院がほぼ全焼し、三代将軍徳川家光のもとでただちに再建が進められた。石州は作事奉行の一人に任じられ、寛永18年（1641）に完成するまでの約8年間、綾小路柳馬場に茶室を造り、公務の傍ら茶の湯の修行に励んだ。

また、当時の京都は後水尾上皇の仙洞をはじめ、寛永文化サロンが形成され、武家、公卿、僧侶、茶人、特権商人などが親密な交流を持っていたことから、和歌、書、工芸等様々な文化・教養を身に付けていったようである。

茶の湯では、家光の指南役の小堀遠州（1579～1647）、金森宗和（1584～1657）、細川三斎（1563～1646）、千宗旦（1578～1658）、松花堂昭乗（1582～1639）らとの交流を通じてその力量を磨いていった。

京都文化人グループの心の師的存在であった大徳寺の玉室宗珀和尚に参禅し、芳春院隣接地に高林庵を建立した。

寛永15年（1638）に「万里一條鐵」の語で開悟し、「三叔宗関」の道号を受けたとされている。

これを機会に衣冠束帯の等身像を作り、手に持つ笏の裏に「なに事も おもはてくらす 面影に

むかひてもまた 何かおもはん 萬里一條鐵
 從五位下石見守片桐源貞俊入 心源禪師之
 籌ちよう室家賜法名三叔宗関三十四歳 皆とき寛永十五
 年孟秋日 彫刻幻容者也」と書きしるしている。

この像を高林庵に納め、片桐家の菩提所とした。

石州は、知恩院の再建完了後いったん江戸に戻り関東郡奉行に任ぜられるが、その後大和小泉にて7年間の賜暇期間を過ごしている。この中で、自己の茶の湯を確立していった。

再度江戸に戻り、石州は充電期間で確立した茶の湯の披露を始める。柳営御物の鑑定にも携わるようになる。

慶安4年(1651)家光が他界し、長男家綱が四代将軍となった。その時家綱は僅か11歳であったため、家光の異母兄弟の保科正之がその補佐役となった。

寛文5年(1665)石州は家綱に点前を披露し、遠州亡き後の将軍家の茶湯指南役としての地位を確立する。後見役保科正之の推挙があったと思われる。将軍の前で茶湯を披露した後に、茶の湯の心得を懐紙に書いて上呈している。これが「石州三百箇条」である。

寛文3年(1663)、父祖の菩提所として、玉室の法嗣の玉舟宗璠和尚(1600~1668)を開山とする「慈光院」を大和小泉に建立した。境内全体が茶席として構成されており、借景で有名な庭園や書院、二畳台目の茶室が史跡、重要文化財として指定されている。



■石州の茶の湯

石州の茶の湯は、前述のとおり、千道安(千利休の長男)の流れを汲む桑山宗仙から学んだものであることから、利休本来の茶の湯の精神である「侘び」を継承しつつ、時代の流れである武士中心の世の中に調和させた「分相應の茶」を説いたことが、将軍家をはじめとして諸大名達に受け入れられることとなった。

● 千利休 → 千道安 → 桑山宗仙 → 片桐石州

● 「石州侘びの文」

「器物を愛し風情を好むは形を楽しむ數寄者なり。誠の數寄者とは云はれまじ(心を楽しむ數寄者こそ誠の數寄者とは云ふべけれ 異本)」

● 「石州三百箇条」

「茶之湯さひたる八よしさはしたる八あしき事」

「數寄者の數寄者めきたる八あしきよしの事」

石州の茶の湯の伝承は「完全相伝」が特徴である。師が自分の持つ全てのものを伝承を望む全ての弟子に伝えようとすることから、分派が生じやすくなる。(⇔一子相伝=家元制)

4 仙台藩と石州流

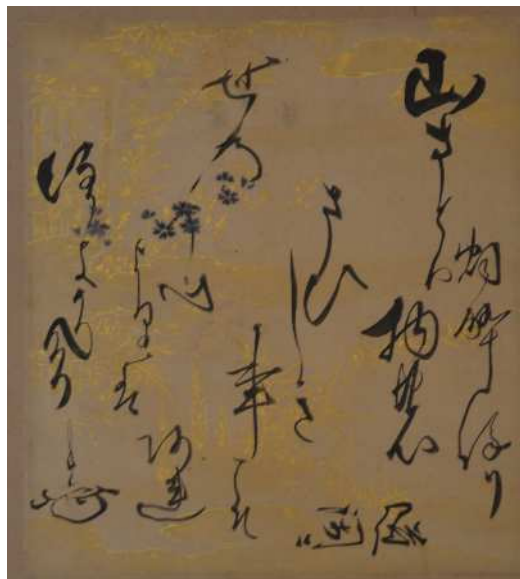
■伊達政宗（仙台藩初代藩主）

伊達家では、「正月仕置之事」として「茶の挽き初」が年中行事化しており、政宗以前から茶の湯が行われてきた。

22歳の若き政宗公が家臣の鮎貝宗重（日傾齋）に宛てた自筆の手紙に、「当世」の茶の湯の稽古に相伴するよう誘ったものがあり、この「当世」とは当時上方で流行する千利休の詫び茶と思われる、合戦に明け暮れていた中でも、積極的に茶の湯の稽古に励んでいた様子が窺える。

その後、千利休や古田織部、小堀遠州らと親しく交わる。仙台藩江戸屋敷に將軍御成りを迎えた時に、茶事準備を織部に依頼していることから、織部を高く評価していた。

「普段うちくつろぎたる中をも きっと改める」という、遊びではない、親しき仲にも礼儀を尽くすという真摯な茶の湯を目指す。



■仙台藩の茶道と清水家

貴人に仕えて茶事をつかさどった茶の師匠のことを「茶頭・茶堂・茶道（さどう）」という。安土桃山時代に千宗易（利休）・津田宗及らが信長・秀吉の茶頭を務め、江戸時代には各藩にも茶道方という職掌ができた。仙台藩においては主に清水家が茶道を担当した。

当流初代清水道閑（1579～1648）は京都の人で、風呂屋町に住まいしていたことから、風呂道閑とも呼ばれた。古田織部門下の茶人であり、小堀遠州とは兄弟弟子の間柄であった。織部や遠州の推挙で、遅くとも慶長18年（1613）までには伊達政宗の茶道頭に禄500石を賜り召し抱えられた。

道閑との別れを惜しんで、遠州は愛用の茶入れに和歌を添えて贈っている。

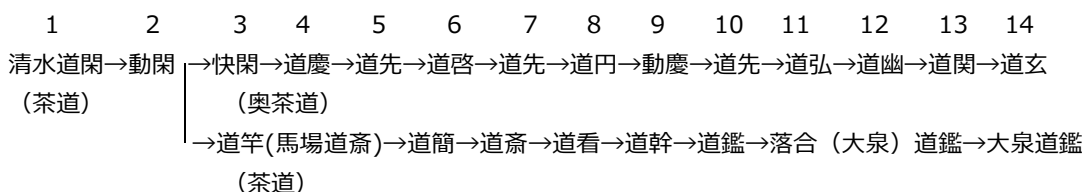
「ととめさる 別れと君か 袖の中に わかたましひみを いれてこそやれ」

道閑はこの和歌から茶入れに「猿若」と命名し、愛用した。

二代動閑（1614～1691）は道閑の外孫であり、その職を嗣いだ。二代藩主忠宗の命により、当時柳営となりつつあった石州の茶の湯を大和小泉で13年間修行し、伝授を受けて仙台にもたらした。

動閑は「石州三百箇条」に注釈を加えて「動閑三百箇条」を残している。

■清水家略系図



<参考文献> 石州流 歴史と系譜 野村瑞典（北村推古書院）
片桐石州の茶 米原正義 他（講談社）
仙台藩と茶道 小井川百合子（仙台・江戸学叢書 大崎八幡宮）